
猫みたいに、

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫みたいに、

【Nコード】

N0438R

【作者名】

蒼

【あらすじ】

受験戦争も終盤。大詰め一步手前のお正月。最後の手段とばかりに神頼みに向かった私に襲い掛かる、非日常な生活。神様、叶えてほしかったのは、大学合格、ってお願いなんだけど…！そんな少女の異世界猫生活。はたして、人に戻れる日は…

だらだら過ごしたいなあ（前書き）

「短編：猫みたいにな、だらだら過ごしたいなあ」の連載バージョン。
中身は以前のままですが、どうぞよろしく願います。

だらだら過ごしたいなあ

冬になると、わざと大きく息を吐いて、それが白いことを確認する。
これが、小さな頃からの私の癖。

「……寒い」

口元まで引き上げた黒いマフラー、耳まで覆うてっぺんにボンボンがついた真っ黒のニット帽子。

カイロの入った黒いコートのポケットに手を入れて歩きながら、人通りの少ない商店街を歩いた。

いつもなら結構な賑わいも見せるここも、正月となれば寂しいものである。

寒がりな私が、どうしてこんな朝も早くから人気のない道を歩いているのかと言えば、その訳は商店街を抜けたところに位置する神社にある。

宗教観念に少々薄い日本人の得意とするもの、つまりは神頼み。センター試験も迫り、もう悪あがきも行き詰った人間の終着点である。

8月からこつち、ひたすらに国語数学英語に日本史加えて生物そのうえ現社に小論文。

友達との間では挨拶代りに年号ゴロ合わせまで出てくる始末で。それでも志望校の判定は、はかばかしくない。

と、なればもう最終手段しかないのである。

勢い込めて歩いた私は、鳥居をくぐり、賽銭箱の前までたどり着いた。

きちんと手と口も清め、いざ！

奮発して500円玉を放り込み、拝む。

「合格しますように、合格しますように、合格しますように……！！」

むーん、力を込めて念じた。力、入りすぎて眉間にもしわが寄るくらい。

そしてハッと気づく。ぶらんとぶらさがる、でっかい鈴がついている紐。というか綱。

鳴らすの忘れてたー！ と思いながら、がらがらと鳴らして。もう一度拝んでから、ふと思う。

受験めんどくさい。
早く解放されたい。

——そして。

「猫みたいに、だらだら過ごしたいなあ……」

“その願い、叶えてしんぜよう”

眩きが終わったか否か、そんな微妙なところで。
ひゅっとする、あのジェットコースター同様の感覚と共に、私の体
は自由落下を始めていた。

馬鹿みたいに上を見上げる私の眼には、四角く切り取られた賽銭箱
や鈴やら拝殿？の屋根やら…

言うなれば、立っていたところに急にぱかっとながれ開き。

そして私の体は重力に逆らえなかったが故に、落下、という流れだ
ろうか。 いや、当たり前だけど。

叫ぶにしても声は出せず。

恐る恐る下を見れば、遙か彼方の下も下に小さな白い点があるのが
見える。

あれ、が。 ゴール…？

まさかの人生のゴール…なんて乾いた笑みを浮かべながら考えるぐ
らいの時間は過ぎて。

暗闇の空間を抜けたと同時に、頬に風を感じる。

「~~~~っ……！！」

そうして、何か柔らかいものの上に私はお尻から落ちた。

「っ、たたた…」

ずきずきするお尻を触ろうとして、だけど手が届かない。

んを？と思って目を開ければ、茶色、ぶち、三毛、白黒灰トラとバリエーションに富んだ毛並みの…猫にぐるりと囲まれていて。

彼らの目線をたどって、恐る恐る下を見れば、完全に目をまわして伸びている大きい猫を私は下敷きにしている。

と、同時に気付く、自分の体。

「…け、がわ……」

直前まで来ていた私のコートと色は同じ黒。

ただし、毛並みが全く違う。今私が見ているのは、黒い化繊ではなく動物のそれである。

そうして私の意志で持つて動いているのは、まさしく獣の手。

同じく黒い毛皮に包まれたそれは、手のひら部分に、誰もが夢中になるようなピンクの肉球が鎮座する。

肉球。

にくきう。

にく、きゅう…！？

「猫——！？」

私の叫びに、驚いた周囲の猫たちは蜘蛛の子を散らすように逃げた。

この後、下敷きにした猫がこちら一帯のボス猫と判明したり、倒した私が自働的にボス業を引き継いだり。ここが魔法が存在するファンタジー世界だと分かったりもするのだけれど。

これだけは言える。

猫も、そんなに楽じゃない。

ほんとにもう、神様。
かなえてほしいのは、この願いじゃなかったんだけど……！！

だらだら過ごしたいなあ（後書き）

過ぎたいとは思ってたけれど（前書き）

『の中身は猫語ということで。』

過ごしたいとは思ってたけれど

茫然自失。

頭の中から覚えた受験用四文字熟語を引っ張り出すぐらい、たっぷり混乱して。

逃げた猫たちが恐る恐る戻って私の顔を覗き込み。

そして、下敷きにしていた大猫：というよりはかなりぽっちゃり系の猫を引っ張り出してから。彼らは横一直線に整列する。

『新しいボス！

これから、よろしくお願いします！』

一系乱れぬ礼：とは、言えない。

小さい猫が、勢い余って前に転がったから。

——そんな感じで、ボス、はじめました。

さてはて、野良猫の生活といえば、まず人は何を思い浮かべるだろうか。

一日中ダラダラ？
年がら年中自由気まま？

……うん、私もそう思う。

正確に言えば、そう思っていた。

けれど、世の中やっぱりそんなに甘くない。

ボスになってから数日で、私はそれを悟っていた。

人間においては生活に大切な三つの要素、衣食住。

猫にとつては基本、食住のみだが、その確保がまた難しいのだ。

まず、食。食べ物。腹を満たすもの。猫になってから、まずはじめに諦めたのが人と同じような食事だった。

というか、食料の調達ですらどうすればいいか分からない。

ボスであることを盾に食料の要求も考えたけれど、前ボスはそれで求心力……いや、求猫力を失ったらしいのだ。

それを聞いてなお同じことをできるはずもなく、かと言って残飯を漁るほど人間も捨てられず。

次に住。

当然だけれども、屋根があるベッドの中で眠れるはずもなく。

しかも季節は冬真っ只中、毛皮があっても寒いものは寒い。

しかも私、猫としては小柄で痩せっぱちらしいから、なおさらだ。

これは、と思った。

これは、人としての知識をフル稼働させなければ、生きていけない……！

狙うは飲食店。

人の良さそうなおばさん、もしくはウエイトレスである。

人が途切れた頃を見計らって、オープン席に座る彼女らに近寄って。

大切なのは可愛らしさ。

あとは庇護欲を掻き立てられればなお良しだ。

「あら、猫ちゃん」

第一印象は大切だ。

物影からひょこりと顔を出して、様子を伺ってみる。

そして、小首を傾げながらにゃあと鳴いた。見よ、この角度！

恥を忍んでナワバリの猫たち相手に練習したのである。

可愛くないと言わせない。

また、そんな可愛さアピールをする一方で、私はお姉さんたちの反

応を見定めようとする。

古今東西、女子供は可愛いものが好きと相場は決まっているけれど、生物の好みだけは読めるものではない。

嫌悪の感情はないか、じつと観察しながらも近寄れば、彼女らは軽く手を伸ばしてくれる。

ここまでくれば、こちらのもの。

ごろごろ懐くも良し、ツンデレ風味にするりと近づき遠ざかりを繰り返しても良し。

けれど今日の私は、どちらでもない手段をとる。

ゆっくりと近寄って、ふんふんと匂いを嗅ぐ。

むむ、これは…ハンバーグソース？

とりあえず、近寄るが触らせないというスタンス。これを保っている…

「レイア、あのネコちゃんはまだ…いるわね。

ほらほら、猫の大好きなお魚よ」

そう、これなのだ！

人間だった私が思うに、人というのは届きそうなモノはそう簡単に諦めない。

しかも、目の前にソレがあるのなら尚更だ。

今みたいに、目の前には可愛い猫（私のことだ）が居て、けれど手を伸ばせば触れそうな所で逃げられる。

こっちに興味は持っているようなのに…となれば、なんとか触れた

いと思ってくれるようで。

自慢じゃないけれど、この方法で食べ物を食べ損ねたことは、ない。

「ちょっと大きくないですか、それ…」

「だって他に無かったんだもの」

その手には小さめの鰯っぽい魚。

焦らない、焦らない…と思っても、どうしたって喉が鳴る。

皿ごと地面に置かれた瞬間、思わずかぶりついてしまっていた。

『んまーい!!』

と叫べども、聞こえるのはニヤアだろう。

この体、どうやら味覚も猫になってしまっているようで、濃い味は中々体が受け付けてくれない。

生魚にも耐性のある野生の動物になっているのである。

おっと、忘れていた。

いったん魚を置いて、おばさんの方に体を寄せる。

「おやおや、可愛いねえ」

「あ、ずるーい!」

うんうん、焦らなくても大丈夫だよ、と思いながら、
手を差し出してきたお姉さんの方にも頭をぐりぐりと擦り付けた。
愛想を振りまいて、可愛さをアピールする。

そうして、ついと離れると、にゃんとひと鳴き。

かじったけれどもまだまだ身がある魚を銜え持ち、私はたったか住
処へと向かった。

今日はまさしく大漁だ…！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0438r/>

猫みたいに、

2011年10月6日15時07分発行